

平成29年5月29日

## 平成28年度六日市医療技術専門学校評価について

六日市医療技術専門学校副学校長 中田佳代子

平成28年度学校評価を行った。平成27年度に引き続き、介護福祉科・看護科ごとに学生による学校調査結果、職員による学校自己点検票を用いた学校評価、学生による授業評価、各学年の成績結果、看護科の実習後のアンケート調査結果をもとに、当校の平成28年度の学校運営について分析した。その結果、学生が自身の学習に取り組んでいっているとの反応を得た。そのことから、どのように学習するのかその筋道を提示していくことで、学生自身の自己教育力を高めていくことができるとの示唆を得た。また、経験や学びを次に生かす、学びの積み上げ、他の模範を取り入れるなど苦手であることが当校の学生の特徴的な傾向であった。一方、今回の学校評価の方法では、学生の学習成果の質や、その学習に影響する要因については明らかにできないことも示唆された。その結果、学生の学習の成果を明らかにする評価の方法の検討や改善、さらに学習方法を示すシラバスの工夫や学生への提示に取り組む必要があることが明らかになった。

1. 目的 当校の教育成果を明らかにし、今後の教育への示唆を得る
2. 方法
  - 1) 学生による学校調査結果（資料1）について平成27年度平成28年度を比較し、平成28年度教育実践についての学生の反応を明らかにする。
  - 2) 介護福祉科、看護科平成28年度クラス成績結果（資料2-1, -2）について、過去2年間の結果から分析する
  - 3) 職員による自己点検結果（資料3）について平成27年度28年度の結果から分析する。
  - 4) 看護科学生による授業評価結果（資料4）を領域ごとの授業の学習状況について分析し、授業評価の方法について検討する
  - 5) 各科の教育の実施状況（クラス運営（資料5）、実習状況（資料6）、合同学習状況（資料7, 8））を平成27年度と平成28年度とで比較し、成果と課題を抽出する。
3. 結果  
資料1～8参照
4. 考察
  - 1) 組織的教育実践の取り組み  
平成28年度は学生の主体性をテーマにして学生の動機づけ、学生の学習方法を明確にしていくことを年間のあらゆる教育実践の場で努力していった。スローガンを「わくわ

くどきどき感動の場面を創る」とし、学生自身はもちろん職員も感動場面を作り出すことを意識した取り組みとなった。それは、学生の評価と、職員の自己点検の結果とが一致していた。つまり、職員が目標を持って取り組んだ実践が成果をもたらした。教員は組織的な取り組み、さらに計画的教育活動の重要性を実感したとともに、自らの考えや計画を情報提供の必要性を実感した。今後、組織的な取り組みを計画的に充実させ、教員間のディスカッションの内容や考えを成文化（可視化）し、教育の方法や成果を共有できることになり、それを学生にフィードバックすることで、学生の学習認識を高める効果をもたらす仕組みづくりを実践していくことが重要である。それが学生への学習の筋道を示し、学生自身が自己の学習への取り組みをイメージする手掛かりとなるといえ、学生への動機づけへの早道と確信する。よって、平成 29 年度の課題として、①シラバスの工夫と提示、②合同学習の科目化への検討、③ラベルワークを用いた参画教育の方法の活用計画の開発、③学習にかかわる情報の提供の工夫、を課題とした。

## 2) 職員の学校評価結果から取り組み課題

介護福祉科の学校評価で、平成 27 年度より低かった中項目、また平成 28 年度低い中項目は、「学校運営方法」、「教職員資質向上」、「授業担当者の妥当性」、「学生による授業評価」、「シラバスの妥当性」、「単位認定の公平性・妥当性」であった。看護科では「教育目標の設定と分析」、「シラバスの妥当性」、「インシデントの把握・分析」、「教育環境等」、「学生への支援」、「社会貢献」であった。

この結果から、両科共通で課題とすることは、次の 3 点であった。それは、①授業の担当者との調整や支援で、講師とともに学生の学習ニーズを明確にするとともに学習場面を作り出すシミュレーション教育を促進し、看護・介護の実践力を養う学習環境の充実を図っていくこと、②学習の道筋をイメージ化への支援につながるシラバスの改善、シラバスの活用方法の検討をすること、③社会の情勢を踏まえ、合同学習、ボランティア活動など地域とのつながりを強化していく教育内容として、教育課程にどう組み込んでいくか、教育の内容の見直しについて検討する、である。

要するに平成 28 年度の取り組みは学生の主体性を引き出す関わりとして、学生自身も意識して自らの取り組みに目を向けることが可能となり、成果を得た。今後は学生を取り巻く環境、社会情勢、吉賀町の住民とのつながりのなかで、学生の体験の中での学びの意味や学習のつくり方を模索していき、学習をイメージできる環境づくりであり、それによって、学生自身がどう取り組んでいくか学生自身で選択、思考する「意志ある学び」へつながっていくと考える。

## 3) 学校評価の方法について

今回は、①学生による学校評価、②学科成績、③授業評価、④職員による自己点検、⑤クラス運営、⑥実習要項の変更の取り組み等の結果を用いて当校の平成 28 年度の教育の成

果を抽出し、今後の取り組み課題が明らかになった。

学生による授業評価の結果から、学習内容がイメージしやすいものについては学生の評価が高い傾向があることが分かった。介護福祉科の学生、看護科の1年生や2年生の学校評価の結果から、学習ニーズが高く、授業や学校の教育に満足していない状況が読み取れる。学生の学習ニーズに影響する因子や実際の学習に影響する要因を明らかにした評価への取り組みが必要であることから、①授業評価項目の検討、②評価基準の見直しの必要性が示唆された。分析方法についても検討して計画的な評価を加えていく必要がある。学生の成績の分析方法もクラス単位での平均点で比較しているため、授業評価との関連について検討できていない。領域ごとの平均点など細かく見る必要がある。学校評価については、クラスの特徴が反映しているきらいがあり、今後継続して評価項目については検討していく必要がある。

実習要項の変更は、実習後アンケートの評価と関連して継続しその変化を見て効果を見ていく必要があり継続していく。実習成績等も加味して検討していく必要がある。看護科の実習の良さを、どのようにデータ化できるか、学生確保の観点からも意義ある取り組みと考える。介護福祉科の実習についてもツールを検討し、実習の良さや効果をPRできるようにしていく必要がある。

#### 4) 合同学習の取り組み

合同学習を開始して3年目であった。平成27年度からラベルワークを取り入れ、協働する体験の場として、関係づくりのためのコミュニケーションや交渉力、プレゼンテーション能力など統合した取り組みを目的とした。学生が早くから取り組んでほしかったなどの意見から平成28年度は1年次からの合同学習を開始した。クラスへの信頼感を育成する、仲間意識を実感する場となり、それぞれのモチベーションに影響する取り組みとなった。

職員は合同学習の「課題・テーマの選択」など両科の学生にとって取り組みやすいものにし、またラベルワークの指導方法など研究会に参加して専門家の助言をいただいたりして、合同学習のモチ方について検討して実施したが、同時に合同学習の困難性も実感した。今後、合同学習の効果を判定する評価ツールを検討していきたい。

#### まとめ

学校評価方法分析の方法として学生の成績、学生による学校評価、学生による授業評価、教員による自己点検結果、実習要項の変更、クラス運営の結果を用いて当校の平成28年度の教育の成果を抽出し、今後の取り組み課題が明らかになった。学校教育評価について評価方法、分析の仕方を検討していく必要がある。